

審議会等議事概要

平成24年度 第5回 滝川市都市再生整備計画事後評価会議 議事概要

日 時	平成25年 3 月 5 日（火曜日）午後 4 時00分～午後 6 時30分
開催場所	滝川市役所 4 階 4 0 1 会議室
出席者	委 員：小篠委員長、鈴木委員、続木委員、田端委員、井田委員 事 務 局：浦川課長、加地副主幹、青木主査、後呂主査
議 事	1 開 会 【委員長】 ▼前は全員の出席ではなかったが、滝川を見直そうと議論としてきた内容をまとめつつ、今後の方針みたいなものをつくっていこうというのが本日の議題。 2 審議事項等 （1） 第4回滝川市都市再生整備計画事後評価会議の議事概要〔資料1〕 【事務局】 ※前回会議の議事概要を説明〔資料1〕 ————— 意 見 交 換 ————— 【委員】 ▼事務局から議事概要を見させていただき思ったことを率直に言わせていただくが・・・商業者の意識の不足などが謳われているが、私は中心市街地が疲弊化した大きな要因というのは、外圧による大店法の緩和、これにより物流の機構がまったく変わった部分。さらには車の普及が背景にあると思う。 ▼滝川の場合、それに加えて、バイパスの開通により郊外に大型店を誘因するきっかけになった。従って、平成に入って10年間で、中心市街地の意識、環境がガラッと変わってきた。それ以後、資料にあるように郊外大型店が進出してきたことからいくと、意識の希薄というよりも、国の施策などにより地方都市の中心市街地を郊外に移転させて大きな要因だと思う。 ▼以前もお話したが、小売業の推移をみると、かつての中心市街地は生活必需品を売る事業所が260ぐらいに対し、それが17、8年の間に140事業所ぐらいに減少した。私が思うには、これは商業者の意識の不足というよりも、環境の変化だと思う。 ▼さらに、栄町を中心とした中心市街地区では、物販を調べてみると、約170から200ぐらいの供給事業者があったが、今では80ぐらいしかない。それだけ減少している。 ▼滝川の中心市街地を形成したのは、少なくとも小売業者が形成した中心市街地だと思っている。そんな中で考えたときに、小売業者以外にもいろんな業種の方がいた。例えば、看板屋、印刷屋、燃料屋など。そういう総合的なものが全部中心部から出ていっている。事業所自体が街なかからなくなるということは、商業者の意識不足や希薄という捉え方をしていなかった。 ▼かつての繁華街は国道12号に係る大通にあったとのことだったが、その軸はまったく変わってきたと思う。背景には、市役所、市立病院（調剤薬局）、図書館、金融機関の張り付きからいくと、やはり中心軸は変わったと思う。従って、3・3地区は脇役的な位置になってきたのかなという感じはしている。

【委員長】

▼そういう商業者の方々からのお話はいただけなかったので、少し偏った記述になっているかもしれないが、議事録の中に書いてある商業者の意識の不足という部分は、都市再生整備計画の事後において、そこで打った施策が功を奏さなかったのではないかとの話の中から、では誰がその後をうまく引き継いでいくべきか・・・商業者だけではないかもしれないが、意識が不足しているという部分は否めないのではないかという話をしていた訳であって、今おっしゃられたようなことに対しての全体的なお話の中で出てきた内容ではないというところだけは理解していただきたいと思う。

▼でかい話というのは日本中どこも一緒なので滝川に限った話ではない中でどうしていくかという話を次の方向性として考えていかないといけない部分だと思う。

【委員】

▼バイパスの影響はすごくあるし、移っていったということもよく分かる。ただ、第三者的にみると商店街主さんの工夫なりが不足しているのではないかと思う。ランターンなど書かれているが、あれだけ人が出ているけども、そこで商売をしようとしている人はほとんどいない。確かにいろんなイベントをバイパス付近ではなく、ベルロード近辺でやっているにも関わらず、自分のところに人を集める工夫というのがほとんどされていないのが実体だと思う。来なくなったというよりは、イベントなどを利用しよう少し商売っ気を出してもらうこと大事だと思う。いろんなものとコラボしながら、来たお客さんに物を買ってもらうように。

▼一方で、駅前の高齢者住宅が非常に成功したのであれば、一発やってそれで終わりではなくて、行政としては施策を継続して集積させなければ片手落ちだという気がして議事録を読ませていただいた。

【委員長】

▼高齢化が進むから、サ高住をつくろうという話とは少し違う政策だと理解しないといけないだろう。中心市街地は商業者だけではなく、製造業もいろんな人もいて、そこに店舗付住宅で住んでいた。つまり、商業者だけではなく、居住者もいたことから、売上があった。また、この間、わくわく感があったような話をしたが、街なかに来ると面白いこと、出来事が起きるので皆が来た訳である。その中で、住宅施策というのは、高齢社会に適用したというよりも、中心市街地に人口を戻すことによって、昔の人口密度について、極端な回復はできないけども、少し回復できるという施策として評価するというふうにすれば、継続的な展開が大いに考えられるのではないか。そういうふうにみた方が、この都市再生整備計画の事業としての位置づけというのは明確になると思う。

【委員】

▼ある意味、高齢者が歩いて住める街という絵を描いたのであれば、そういう集積をつくるべきだろうし、改めて商店街を持つてくる必要はないと思う。

【委員長】

▼それもすごく議論になっていて、これだけ購買力が落ちているのであれば、商業床が必要だとは思えない。商店主もそれほど商業意欲があるかというところでもない中で、空き店舗が増えているのが実体なので、そこにまた商業を持つてくること自体ナンセンスだろう。であれば、違う機能を持って来るということの中で、例えば、住宅というのは大いにある。

【委員長】

▼それでもっと議論していたのが、向こうに出店していた大型店というのが、未来永劫そこに存在するということは絶対なくて、購買力が落ちた瞬間に大型店は撤退するだろう。そうしたときに買物難民が増える。それをどう担保するのかということになったとき、もう一度中心市街地の出番があるかもしれない。そのために担い手づくりということをしっかきしていけないといけないう話もしている。

▼そんな中で商業床にこだわらないような立地を考えていくことがすごく大事である。都市再生整備計画ではコミュニティ施設をつくり、図書館を誘致し、いわば商業に対しての具体的なハードづくりというのを別にやっている訳ではない。それがもう少し継続的に行われること、又は、そういうものを使いながら活動を支援するということを経営的に行われることが、実は大事ではないかと前回議論させていただいた。

【委員】

▼商業者の意識の部分だが、バイパスなどは一つの要因かもしれないが、全部ではないと思っている。自分が商店街にいてよく分かるのが、意識の問題がかなり低い。自分の仲間のことを言うのも変だが、言い訳に郊外の方を使っているだけで、ここ15年で店舗を改装した話はあまり聞いたことがない。それだけ意識が低くなっているの、これをもう一度・・・今若い人たちの中ではモチベーションが上がってきているので、この人たちを起爆剤にして周りを巻き込むような形に商店街自体がならないかと思っている。申し訳ないが、高齢の方に大きな期待をしてももう難しいので。

【委員】

▼確かに商業機能を取り戻す考え方はこういう実体からするともう成り立たないと思う。従って、中心軸に特化した産業クラスター・・・街なかクラスターのビジョンというか、今ある部分での街づくりをきちんすべきであり、先ほどの3・3地区の脇役も重要だと思う。例えば、小樽では丸井の跡地にサ高住を建て、その需要が多いとの話もある。また、札幌の手稲地区には、大手の餃子店が集中しているが、これがその地域に物凄くインパクトを与えている。必ずしも物販に拘るのではなくて、そういう総合的な部分をまちづくりとして考えていく必要がある。その中で、高齢者に向けて生活必需品を提供できるように機能を考えるのであれば、中心市街地に特化した考え方を示すべき。そういう意味では、団地、まちセン、図書館などに生きてくる計画と思う。

【委員長】

▼それともう一つ考えないといけないうのは、社会現象がこうだから、それに対応したようなことをやればいいかという話で、何で中心市街地が昔賑わっていたかということ、先ほども少し話したが、そこに来ないとできない、楽しめないことがある。札幌に行けば大丈夫かもしれないが、岩見沢や砂川へ行ってもダメで、滝川に来ないとできないことがあったから、みんな滝川に来たということだと思う。

▼超高齢化社会になっていくので、高齢者のためだけに何か特化した施策を打つというのは、どこの社会も同じになっていくので、滝川だろうが、どこであろうが一緒になってしまう。先ほど言っていることとは少し真逆のことになってしまう可能性があるの、活発に動いている街なか・・・モノづくりを含めてかもしれないし、文化・芸術かもしれないし、郊外に住んでいたらパツとしないけど、街なかに出てくるといろんな人がいてやっぱり楽しいという場所にしていこうという施策が一番大事。そのときに滝川でしかやっていないランタンフェスティバルみたいなものの位置づけを活性化にきちっとジャストミートさせるようなことができないだろうか。ランタンだけではなく。

▼そういうものが今まで係り結びとして、ストーリーとしてハッキリしていなかった。ストーリーなしで全部やっていたのではないかというような話をこの前もしていた。

【委員】

▼ランターンは素晴らしいと思う。ボランティアもいっぱい出ているし。あれだけ盛り上がっている割には商売をしていない。

【委員】

▼ボランティアが300人に膨れ、そこに関わっていると自分の店が開けられないというジレンマがあるようだ。

【委員】

▼ただ、コスモスマラソンも含めて、ほとんどシャッターが閉まっている状況からして、意識を変えないとダメだと思う。

【委員】

▼やはり、自分たちがわくわくした形に持っていけないと、周りの人がわくわくする訳がない。これをいかにつくっていくかが問題だと思う。だから、こういうハードの部分と同時に職場として毎日通っている人達がわくわくするような施策が必要。そこで一番いいと思うのが、昔やっていた一店逸品運動だが、そもそも逸品を出せない店は廃業すべき。やはり自分がおすすめる売りたいモノがない限り、絶対にわくわく感は生まれないと思っている。

▼イベントもたまにはエポックとして必要かもしれないが、日々わくわく感がないと、そのときだけ人が集まっても、翌日になったら誰もいないでは意味がない。日々の情報発信力があまりにもないことから、商店街が束になってみんなで取り組めないものか。そこで、一店逸品をもう一回復活させたい気持ちはある。ただ現状、参加店があまりにもなさすぎる。

【委員】

▼どうしてか滝川の業種は持続しない。イベントにしても事業にしても。これまで活性化のためにいろんな事業をやってきたが、プツンと切れる。

【委員】

▼一つには目標意識がないから。やらされ感で取り組むと続かないし、労力的、金銭的に大変。

【委員長】

▼インセンティブが自分のところに戻ってこないから。人はボランティアばかりだと疲れ切ってしまう。

【委員】

▼自分はそれでいいと思っている。それこそ一度商売抜きでアホになるときがあってもいいと思う。でも商業主はそういうふうには取らない。

【委員】

▼市民の巻き込み方が下手。なんかやっているぐらいの感じ。それこそいつも思うが、栄町のスーパー周辺に住む人達は、スーパーがなくなると買物難民になる。撤退するときになってはじめて大騒ぎする訳で、みんなで買物しそこを支えるという感覚がまったくない。だから市民を巻き込むことをしていけないと困るのは自分たちだというところが希薄な感じがする。大手は採算が合わなくなればすぐに撤退するので、地元で支えなければいけない部分は大事にしないと。

【委員】

▼昔は、街に行こうという言葉 みんなが気軽に使っていた。今はどこどこに行くという目的意識がはっきりしている。

【委員長】

▼そこが、遊歩客相の部分に繋がる。

【委員】

▼今は街に行くという言葉を使わなくなっている。

【委員】

▼10数年もすれば滝川の人口は3万人台となるので、市としてもコンパクトシティ・コンパクトタウンを推進しているが、街なかの賑わいということでは、ある程度居住人口を増やし、その中でワクワク感が何か考えているところだがなかなか難しい。

▼イベントにしても、なくなっていったイベントは数多くあるが、それでも少しずつ育っており、例えばランターンは今年で11年目。あれを雪まつりなどと融合させて、もう少し大きなイベントに育っていければと思う。ただ、あのイベント時間は、なんだかんだいっても午後5時から8時までの3時間なので、それをもう少し期間的に継続できて、滝川の冬の風物詩になればいいと思う。

▼滝川にも元気な若者が経営しているとのことだったが、例えば革製品などを扱っている元気なショップが何店舗か集まっていることから、全道、全国に情報発信していけば、結構楽しいエリアになるかと思う。

【委員長】

▼大量生産しているモノではなくて、そこで作っているモノや食べ物もあるかもしれない。滝川に行けばこういうモノが買える、こういうものが味わえるというふうには昔はやっていた。例えば、滝川銘菓といえどコレというのがあり、昔から商売されている老舗のお菓子屋さんもあっただろうし、お菓子屋さんがあるということはお茶屋さんもあるだろうし、関連事業としていろんなことになっていたはずである。それに対し経営者が自信を失っている状況にあると思う。その人達にもう一回こういうやり方をやったらできるのではないか・・・、または、若い人で本当にやる気のある人達を支援し、新しい企業を起こす業態を作っていくことの方がいいのか、もう少し地元の方と議論が必要かと思う。その辺のところをターゲットにしてやっていく必要がある。

▼この前2脚セットのワイングラスの1脚を割ってしまったのだが、購入したお店（札幌）では扱わなくなっており、さらに、どこのお店でも購入できなかった。でも、同じグラスが欲しいとなると、ネットで買うしかない。アマゾンや楽天などは、売場を提供しているだけで、その下に小さなショップがぶら下がっている訳だが、その中ですごくワイングラスに特化している名古屋のショップがあり、情報も非常に多く、今こんなデザインが出ているという情報やすごく購買力をそそるような情報が提供されているので、そこで注文すれば2、3日後には家に届く訳である。

▼先ほどわくわく感と言ったのは、そこの店舗に行くと商品はそんなに置いてないが、店主に聞くとすごくいろんなことを知っていて、「これを買うとあなたの思っていることが満たされる」とか、「他にこんなモノがあり、もっとあなたを満足させてあげられるモノがあり、うちなら取り寄せることができるけどどう」といったことが分かる。大型スーパーでは、モノを見て買うので、相談して買うという話はない。相談して買える小売品というのが、中心市街地の特化した個性店にはある。物流のネットワークの中でたぶんそういう商売ができる状況は、昔よりも今の方が通販を使うこともできる・・・どれだけ儲けを出せるかという問題がいろいろあるかもしれないが・・・そのような形で客を取り戻そうと思えば、いくらでもやりようがあるのでないかという気がする。その辺に小売をもう一回復活させる方法もあるのかと思う。

▼もう一つは、ランターンフェスティバルだが、同じ日に岩見沢でもドカ雪祭りが行われている。これは客を分けているかもしれない。お互い同じような状況で中心市街地が困っているのだから、タイアップするとか、日にちをズラすとかいろいろやればもっと相乗効果が出るという話。滝川は滝川だけでやろうということだけではなくて、お互いイベントを連携し合うこともありだと思う。函館本線を使いながら、いろいろなイベントを回るといったことも可能。

【委員】

▼オータムフェスタもバラバラにやっていたのをまとめた。

【委員長】

▼あの力はすごい。オータムフェスタはそれで一気にうまくいき、すごい集客力を持ったし、旭川の買い物公園でもマルシェという形でやっている。ああいうのはやりようによっては集客力を引き上げることができる。

【委員】

▼いろんなものをやっているのだから、続けてやることはできるはず。

【委員】

▼留萌では若い人が中心となりやん衆まつりというのがあるが、これは市民を巻き込んでやっている。また2年前駅前に盆踊りを初めてつくったが、これも若者や町内会を巻き込んでのづくりである。留萌では花火などを含め唯一特化した事業にしている。要するに、地域住民を巻き込んでいるというイベント。

▼やん衆まつりは、11月と2月の2回実施しており、先月は大雪の中であったが開催したところ、非常に評判がよく当初計画の倍くらいの市民が街なかに集まった。その考え方の中に、次回に繋ぐよう、若い人たちが活動しやすいよう、基本的な財源を残して次へ次へと繋いでいる。トップの人も1回交代。そういう人づくりで繋いでいくことが街づくりに必要だと思う。

【委員長】

▼伝統的なお祭りは結構、今年の総代といって毎年毎年代わる。責任をみんなでカバーしていくという・・・一人がずっとやってもおまかせになってしまうかもしれないがそうじゃない。

【委員】

▼基本的な財源を繋いでいくらしい。そうすると安心して若い人たちも活動ができる。

【委員】

▼財源はどうしているのか、寄付頼みか？

【委員】

▼やん衆まつりとは、大きな建物で行うバーベキューのようなもの。そうすると、海産物をパックにして700円位のモノを1,000円位で販売し、その300円を基金として積む。

【委員】

▼どちらかというと、こちらのお祭りは寄付が多いので、各基金が厳しくなるとできなくなる。我々もそう。一番最初にそういうのをカットする。そういうのに頼らない、自立できる運営というのが必要。

【委員】

▼積極的にそれを買収求める、そういう空気をつくったのが今に繋がっているのではないか。

【委員長】

▼今後どうしていくかの方向性を取りまとめたいということで、もう一つの審議事項として資料を用意いただいたので、そこに話を移したい。

(2) 具申書に係る意見交換・とりまとめ [資料2] [資料3]

【事務局】

※前回会議の議事概要を説明 [資料2] [資料3]

————— 意 見 交 換 —————

【委員長】

▼この中で議論されたものをどう取りまとめるかという話と、こういうふうに住立って具申するという話が2つあると思う。ここで何を話できたかということとか、こういうアイデアや課題整理だとか、それに対する方向性だとかは、前段でも議論してきたので、ある程度取りまとめはできると思うが、私たちが組織された目的というのは、都市再生整備計画の事後評価委員会ということだったので、いわゆるそことの絡みを言わないといけないと思う。

▼それはどういうことかと言うと、都市再生整備計画というのは、まちづくりのために総合的ないろんな事業に対して交付する交付金事業という位置付けで、滝川市としては、図書館の整備だったり、まちづくりセンターの整備だったりする。そことなかなかうまくいかなかったという反省もありながらイエロープロジェクト、ランターン、賑わい再生ロードなどを評価していた訳である。

▼概ね、設定数値も何も良かったが・・・というところから議論が始まり、いわゆる今まで進めていった市の事業というものではちょっと解決できないという部分が実は潜んでいる。それを市長にあげていく。こういう事業自体のやり方は間違っていなかったし、設定した数値目標もある程度達成されたが、根本的な解決が何かできていないのではないかと。だから最後の資料2で説明してくれたような次なる計画づくり、その支援づくりや組織づくりという方向に話を進めていく必要があるというように。だからその係り結びを前段で整理しておかないと、集まった話がこんなことだから、こうやったらどうかという言い方では市長も何だという話になりかねない。そこが大事だと思った。

▼だから、ここは皆さんと議論しておかないといけないと思うのは、そういうことをまだ行政主導で一所懸命やり続けることをここでやるべきなのか、行政プラス地元商業者、商業に限らない企業、市民を含めた形で計画づくりをし、運営をし・・・ということが必要なのかという部分も実はある。

▼今までずっと行政主導で中心市街地に取り組んだ。それではうまくいかないかもしれないという部分に話もあった訳で、このつくりをどういうつくりにするのかということに対して、少し方向性を見出しておかないといけないと思うところはある。ただ今の段階でそのように開いたところで、誰がやってくれるのかという部分は事務局として結構大変である。実際相手がいるかといえば、そうでもない。その中で少しずつ参画してもらえようような状況をつくることをやっていく・・・ということが意識を変えていく部分だと思う。

【事務局】

- ▼課内協議においても、11ページの支援、ソフト事業、意識改革も含めたキーワードに対し、どこ目線のスタイルになるか議論された。行政が最終的に中活の計画策定の事業主体になりつつ、次の計画についてもやはり私たちが策定するとなると、一応表向きは行政で、その中身ということになると、当然他分野の方に入ってもらい、本当に自分たちのものをつくってもらわなければならないし、行政がこれまでのように、いろんなハード系をやりつくせるかということになると、求められてないものをつくってもどうしようもない話である。
- ▼その部分からいけば今度はソフトにシフトしていくことも出てくる。そのときに、意識の変化がいいのか支援がいいのか手段（手法）がいいのか、その辺非常に言葉も含めて整理しないといけないところもある。しかしながら、今日は甘えさせていただき、これをそのまま出して皆さんのご意見をいただくことで、方向性の部分をつくった方がいいということもあり、失礼ながらこの状態で資料をご提示させていただいたのが正直なところである。
- ▼例えば結果として「協議できる場づくり」という表現もあるのか、「市民で課題を共有する」という表現もあると思う。とりあえず今までの協議の流れから、意識の変化という言葉を使った。支援という言葉も、支援する側とされる側に分かれ、今みんなでやっていこうと言っているのに、その言葉はどうなのか・・・これもみなさんの意見をお聞きしたい。
- ▼意識改革の部分でいくと、行政自体も改革していかないといけない。そもそも行政自体の考え方が、今回やってみたことによって出てきた部分は、やはり狙いが違う。大型店に持っていったものをもう一回戻すといったイメージの中で進んできて、そもそも考え方が違ったのではないか。やることをやってこないのだから、当然実感が湧かないという部分に行き着いた。それが本会議においてまざまざと突きつけられたものだと思う。
- ▼数値的には明らかに通行量などは達成したが、実際として商店の方はどうなったのかといったときには、商業床はオーバーフローになっている状態ではないか。では、そこで残ったお店は生き生きとやれるような環境づくりをしているのかということからいくと、行政では、結局そういうテーマの中で取り組んできたが、解決できないものが突きつけられて、なおかつ、そこにまた大きな影響を及ぼす状態である。
- ▼この状況において、商店主の意識というよりも、行政自体の頭を切り替えないと、突っ込んだものができるかどうかということにかかってくるかという気もしている。今後、まちづくり会社の位置付けだとか、中活協の位置付けだとか、そういったものもどんどん動く組織に変えていかないと、きっと我々行政がいくらこう言ったとしても、当然ゾーンが広がっていることからすると、行政だけでは担えない部分があると思う。そこをどう補完していくのかということも当然考えていかないといけない。

【委員長】

- ▼中心市街地を動かすためにどういう組織立てをするのかという青写真がない限り、行政が支援するという話にはたぶんならない。だから、中活協みたいな組織が今後もあり続けて、それに対して支援するというのであれば非常にわかりやすい構図だが、それが少し崩れていくということを想定するならば、まずどんな組織をつくるのかというところに話を持っていかないと、支援も何もあったものではない。
- ▼さっきの話から繋げていけば、そういう組織づくりも必要ではないかという部分に前段から持っていけないとダメであって、今つくる必要があるかとなると、どんな組織にするかという部分が一回も議論されていないので、継続的に模索していかなければならないというふうに課題として置かざるをえない。

【委員】

▼今までと同じように乗っかっていけばやってくれると思ってしまう。

【委員長】

▼そのための人材、駅前ビジョンと結論は非常に似ている。だからあのとき「ビジョンは駅前ビルのビジョンではなくて、中心市街地全体のビジョンにしたい」と言ったのはそういう意味で、今この話と非常にリンクしている訳である。人づくりとか、その掘り起しをするとか。その中で今までの既存の事業自体のストーリーとして束ねていくような作業について皆さんと協議していくという話が必要ではないか。その上で既存組織を使いながらでもいいだろうし、それに新しいものを加えるのもいいだろうし、又は担い手を新しく作っていくようなこともあるだろうし。それは皆様方の地元の人たちの思いの中で出来上がっていくものだと思う。

【事務局】

▼非常にその辺の仕掛けについて、「行政側でこういうことをやらないかと呼びかけていく」のがいいのか、「これではいけないということで、自発的に役所の人間を呼んでみんなやろう」というのがいいのか。先ほどのお祭りの感覚ではないが、やらされ感だとか足かせをつけていくような状態でいくと、結果的にお役御免で、面倒くさいから行かないという話になったり、面白くないので次から行かないといたりする可能性は危惧するところである。あまり過保護にするとすべてこちら側で取り持たないといけない話になるし、出口まで見つけ出さないといけないということになると、結果的にその方々というのは、どこで自分たちのカラーを出していくのかという部分が非常に難しく、そこはいろんな自治体さんの状況を勉強させていただいているところである。

▼砂川市さんには、いろんな若手により、とにかくアイディアフラッシュで100個くらい上げてでもやってみようとの試みが始まっている。そういったところには職員の垣根が非常に低く、高飛車な態度ではなくて、そこに飛び込んでいく。あくまでも行政の職員でなくても一人の市民という感覚で飛び込み、そこから付き合いをはじめていくことをしないと、どうもうまくいかないということも最近思うところもある。

【委員長】

▼砂川のNPO法人ゆうには、市役所の職員も入っている。なんで繋がっているかということ、施設を管理している訳だが、一つの動きとして、市民劇団がある。その市民劇団のメンバーでもある訳である。もちろん商工会の人たちも一緒に、他の人達も加わっている。そういう同じサークルに入ることによって垣根がない状態にある。その市民劇団というのは、こけら落としを何とかうまく成功させないといけないので、シナリオを募って市民劇をやろうということをつくられた劇団であり、非常に高いモチベーションで取り組んできた。それがずっと繋がっている状態から、館の運営自体は100%儲けており、他の低利用となっている公共施設の管理もおまかせしたいとして、指定管理の輪がどんどん広がっていくような展開になっている。その中で商店街というのがどうにもならなくて、これをどうすべきかという話で四苦八苦していることだと思う。そういう繋がりがあるからできるというのがあると思う。

▼行政が何をしなければいけないのかという話のときに、ハード整備はしたけど、そこに関わっている市民の人達の活動を支援するということまで組み立てられなかった。今話しているのはそういうものがきっかけになるかもしれないということを話している訳で、それがこの事業の中ではなかなかできなかった。では、ハードは終わったので、ソフトの話だけで支援できるかというところが結構課題であると思っていて、それはすごくやりにくくないか。

▼岩見沢の話を見ると、岩見沢は駅自体が複合駅舎なので、半分は市が持っている公共施設が入っていたり、大学のサテライトが入っていたりとかして、利用できるスペースがあることから、そこをどのように利用するかということを考えないといけなくなった。また、自由通路もすごく長いことから、あれも自主管理みたいなことをして、何か利用できるところは利用できるようにしようと市民と一緒に考えて考えることになった。そのため、ハッキリした目的があった市民グループが駅前に出来上がった。それに対し、駅前地区もいいが、中心市街地区もメタメタな状態であるので、何とかこちら自分たちのパワーで取り組みたいとして、活性化ビジョンにより支援しようと、初めて中活計画と合体するような話になってきた。ということで、行政の出番も出たし、支援という話にも繋がった訳である。

▼このような母体が滝川ではまだ見られない。だからその母体づくりからはじまるという中で、非常に黒子として行政がそこに入ってやるかどうかということが一つのパターンとしてあるし、いやいや市に対しては、整理ができていい面もある。評価が出ているのだから、もう一回できなかったことを実行するため玉を一発セットしないとダメかもという方法もあるかもしれない。その玉が何かということはあるが。そういうふうにはセットして、ハード整備とソフト事業を見つけたプログラムの中で市民の組織づくりを一緒にやっていく。当初の目的はその施設の管理運営というだけの話かもしれない。そこから、飛びさせていくような発展を見せるという仕組が取れないのかというつくりが二つあると思う。そこまでちょっと見せないとすごくフワっとした言い方になっているので、そうかもしれないけど具体的に何を模索するのかということにならないか。明確な何かを持ってこれでそれをやるという何かを少し入れないとつらいのでは。

▼組織づくりを市が支援するにあたり、黒子に入らないとたぶんうまくいかないかもしれない・・・ということで、次のステージに持ってけるかどうかというところがある。いろんなものをやっており、意識のレベルも状況もバラバラの市民を集め、議論しながら街のことを考えていく構成という形で、既存組織の人達といろいろ握手しながら、イベントに参画してもらう展開が想定される。

【事務局】

▼問題意識が持てるかというところがある。

【委員長】

▼そんな人がいるのかということ。

【事務局】

▼本当にそこまで考えて、自分の故郷はこれではまずいと思う人がいてくれるかどうかというところにつける。本当に心の中にしっかりしたものがないと、わざわざ自分の時間なりをそこに集中していくことにはならないし、続かないと思う。

【委員長】

▼例えば、まちづくり会社の巻き込みとして、そのまちづくり会社に担ってもらう役割をもう少し強化する必要がある。その中で彼らに、中心となって今話しているようなことを、実行する部隊として動いてもらうなど、何かそういう母体がないと動かないのではないか。その母体を0から作り出すというのは、途方もない時間を要することから、既存のまちづくり会社を活用しつつ、情報発信をしていくことがやるべき話だとすごく思う。しかし、同時にセットが必要。

【事務局】

- ▼そういったところの情報発信が弱いのは、当然今までの議論でも出てきており、我々としても上手でない。市民になかなかそこまで理解してもらえず、わかってほしいが、情報を出し切れしていないことから、非常に反省点としてある。では、そこを行政で引っ張るとなると「役所にまかせればいい、それが仕事なんだから」という話になってしまい、また引いてしまうことからいくと、行政ではない何か違うカラーのものとなると、まちづくり会社（三セク）になるのか、NPO法人になるのか、そういう組織がやっぱり必要になってくる。
- ▼今回ランターンの話も出たが、ランターンの実行委員会にうちの職員も参画しており、仕事ではなくて、市民として参画している。特に行政として頼まれて参加している訳ではなく、個人としてお願いされて参加していることからいくと、本人の人間性もあるが、非常にうまく回している部分を見てみると、ああいう繋がりが自主的に取り組む意識を生んでいると思う。また、300人ぐらいまでボランティアの輪が広がったことからすると、そういう繋がりにより中心部の活性化に繋がる姿が最終形であり、我々が描かなければいけないところだと思う。

【委員長】

- ▼本当であればそういうランターンの実行委員会が自発的にそういうことを思い出せば一番いい図式である。だけど、先ほどの話にあったように、あれはあれでやろうとすると、他のことができなくなったりするという中で結構ギリギリでやっている状態になっているかもしれない。だから、そこに参画する人は、心の中で「このようにすればうまく展開し面白くなるかもしれない」というふうに思っていない訳ではないかもしれないが、でもそれを口に出して言える状態ではたぶんないかもしれない。何か思いがあるのであれば、彼らと一緒にランターンの可能性を探る議論をしていくというのもひょっとしたらあるのかもしれない。

【事務局】

- ▼駅ビルに関しても市民の皆さんがどういう感覚を持っているのかというところになってくると、なかなか反応が見えてこない。先生が言われるように玉を用意してというのは、何か3・3地区の開発においても、皆さんを巻き込むような仕掛けづくりの中でやるべきなので、行政もそういった開発を進めるため、資金、仕掛けをしっかりと準備するというものに変えていくのか。そういうことをやらないとなかなか市民の皆さんとの感覚は違うと思う。
- ▼本当の母体と運営する母体をつくるにあたり、そのきっかけとしてハードとセットとなったソフトをみんなで考えるような母体・・・？

【委員長】

- ▼目的がはっきりしやすいのでないか。別にハードがなくてもいいかもしれないが、何をやるのかという目的がはっきりするようなことを仕掛けてやらないと、やろうというふうに思わないのでは。ランターンだってそうなのだから。もっと小さいことからやるのもありかもしれない。福祉センターの活動をもう少し活性化するためにというところからスタートすることもあるかもしれない。大がかりに振りかぶりすぎかもしれない。今までの事業というのが悪い事業ではないと評価するならば、それを継続的にやるべきであり、その方法を考えるべきだということだと思う。それならば、この都市再生整備計画で実施した事業をどうやったら、もっと継続的に活発的に行っていけるかということを考えるというようなことの方が割と地道な話かもしれず、実行はしやすいか。

【事務局】

▼今日の話ではないが、年寄だけでなく若者も来るように関連したいいいネタがあればいいが。

【委員】

▼話を聞いていると、なるべき姿の認識がそもそもない。だから議論が進まない。市側としてその辺をどうするのか我々も考えないといけないが、最終的に我々がどういうふうにしたいかというところがなければ進まない。市でつくったものだから市で勝手にやってということになるだろうから、我々も含めてこういうふうにしたいとか議論が必要。もう少し我々でやりたいということであれば、それをやるための仕組みを考えないと、形としてキレイに整理されているけど人が歩く姿は出てこない。

【委員長】

▼本当にやるべき姿は何なのかということを経営化するための作業をしていくことに対し、いきなりあるべき姿がこうだからというふうには言えないし、こうではないかとみんなが思えるような状態にしていくため、やはり最初はやりやすい小さなことから進めていくことの方がいいのではないかな。ただ、それをほっといて進めていくとジリ貧になってしまうので、じゃ、そういうものをもう少し上の方向に見てもらえるような仕掛けが必要。それがワークショップなのかは分からないが、何かしらここに書いてあるような感じ。そういうことを来年1回か2回か入れながら、小さいグループの支援をしていく。その一つでなくてもいいが、商店街の若手の集まりとか、やろうとしている人たちと連携し、ワークショップや個別に何を考えているのか、どういう方向がありえるのか議論をしながら進めていかないと、いきなり実施してもたぶんできないのでは。このように段階的な仕掛けでいくというのが方法論としては必要でないかと思う。

【委員】

▼それをやるために、模索するためにもがくというイメージがあってもいいのでは。玉が切れれば出すのではなくて、この1年か2年か分からないが、時間かけてもがき、我々が協力できるような形につくろうという時期ではないかな。キレイな絵をかいてもそのままいかな。又は市役所、市立病院、駅前の高齢者施設など、こういうふうにしたいとしてつくっている訳である。では、それを理想の姿にして持っていく。決めたルールでルールをもう一回なぞるというのもありだと思う。とりあえず、事後評価委員会の中では、やってきたことについては成果が出ているという評価なので、そこは今までやってきた議論としてぶれてないと思う。

【委員長】

▼だから、そこは良かったという評価を一旦した上で、できなかったということはどうやって進めるかという部分を載せていくことである。

【事務局】

▼物はできているけど、魂が入ってないというか、そういう世界なのか。又は魂は入っているが、自分たちがそれを感じていないのか、その辺も現場の職員にしてみれば、やっているけど、かみ合わない感覚もあるかもしれない。

【委員長】

▼図書館の職員がそれぞれの個店を取り上げて、それに関連する図書をコーナーとしてつくっている方は非常に意識があり、何とか市役所にできた図書館だからそういう関係をつくりたいとして取り組んでいるかもしれない。だけど、一方で商店街の方がその認識になっているかという部分はまた別の話である。だからその市役所にしてみれば、歯がゆい状態になるかもしれない。そこが問題である。お互いにやろうやろうとしていることが、結合されていない。それには情報発信があるかもしれないし、もっと別のケースで話し合う必要もあるかもしれない。

【委員】

▼あるべき姿というかビジョンを共有するために、協議する場が必要なかもしれない。まちづくりセンターにしてもそのビジョンを具現化するためにもっとまちづくりセンターを活用し、情報発信をしていくことが必要だと思う。

【委員長】

▼そういう大きな目標に向かって、都市再生整備計画でつくったものを活用していくような図式を生み出さないといけないのではないかな。そうでないできなかったということが、そのまま残ってしまう。そのための支援を来年度に向けてやっていく。又は、そういうところを事業化することが必要である。ということが評価委員会の具申となる部分ではないか。

【委員】

▼私はずっと思うのは、先ほど言ったように、都市の中心軸が変わったという認識、改革というのはみんな口には出さないが思っていると思う。市民などが必ず行かなければならない、又は利用しなければならぬ施設というのは、市役所であり市立病院であり、金融機関である。そういう部分が確固たる実体としてある。

▼その中でソフト事業にしても、いろんな事業をやるにしても、意気投合して取り組める雰囲気づくり、人づくりという部分をどうしていくかということが一番大事だと思っている。

▼他の街と違ってこれだけ市役所があり、市立病院があり、図書館があり、金融機関もある。こういう一点に集中しているところは割と他にはないと思っている。そこが中心軸だろうという発想をすれば、先ほど言ったように、物販をうんぬんするよりも、市民がそこに行けば用務を足せる、そこに休憩場所もあるという部分が、これからの中心市街地の機能としては必要だと思う。例えば、高林には高齢者が半日くらい、話をしたり、物を食べたりする姿が多くなってきている。そういう部分の意識改革が必要だろうと私は思っていた。

【委員長】

▼今までの施設とは少し違う行政機関、公共機関、公共施設、医療機関に有効となる施策とは、それらと商業がどういうふうに関係できるかという話であり、確かに病院改築により調剤薬局が周囲にたくさん建設されるという話もあるが、そういうことではなくて、街に回遊行動が生まれるような・・・病院とは目的で来る場所だが、その次いでに何かという部分で、病院とタイアップできるような形で生まれてくる機能みたいなものに、仕掛ける必要性というのがまあある。

【委員】

- ▼そうだと思う。先ほど私はクラスターと言ったが、例えば、高齢者施設が周囲にできているが、そこにいる人は本当に外に出たくないのかということ、出たいと思う。買物や幸福感を求めて外出する部分もある。それをやっぱり提供するの、これからの商売というか若者の利販売だと思う。同じ駅前にできたマンションに住む人方は、外に出たり買物にしたり、出ていくと思う。そういう部分を謙虚に意気投合するような話の輪で。
- ▼全国で空き店舗がない商店街は一つしかない。埼玉県秩父市のなんとか商店街。全国であそこしかない。常に空き店舗が埋まる。これは、ソフト事業の展開により、住民がそこに来ないとならない、行きたくなるような仕組みがあり、週末街に来させる。そういうことだと思っている。

【委員長】

- ▼だからそれを地元から湧き上がってくる気持ちでそのような仕組みをつくっていかないといけないので、今ここでこうだというふうにするのは得策ではない。その湧き上がるというものをつくっていくような場づくりというものを少しやる。そして、その場を宙ぶらりんにつくるのではなくて、今までやってきた都市再生整備計画でやってきたもの、活動をより活発化するために、支援するということをしつつ、その場づくりを横にどんどん広げていく仕掛けが必要。

【事務局】

- ▼新たなモノをそういうふうにつくっていくという部分と、既存にある組織を検証しつつ、その中でもどういう感覚なのか、本当にやるべき像というものが皆さん同じ意識でやれるのかという部分も分析していかないといけない。
- ▼既存のあるものをただ単に壊せばいいという話ではなく、なぜ形骸化したのか当然考えないといけない。単に総会しか開いてなかったため組織が形骸化していき、運営費もままならないというところで、その組織は結局機能しなかった。次の中活に対してはやはり改善していかないといけないが、それ以前に我々が考えないといけないのは、なぜその組織が必要となり立ち上げたか、やはりもう一度検証しないと次には進まないだろう。
- ▼当然また新しいものをつくったとしても、同じ現象になっていくというか、その積み重ねにしかならない。どんどんそれが増えていくだけの話。新しいものをつくるということも一歩前進であるが、やはり既存にあるものをもう一回見定めるという検証をすることも一歩前進かと思う。

【委員長】

- ▼ここでは都市再生整備計画でつくられたものの評価しかしていない。それでもれているような既存のものを今回見直して、それがちゃんと適正なのかということ判断しながらでないと、新たに生み出さないところはある。

【事務局】

- ▼事務局的に勝手なことを言わせてもらえば、中活が3月で終え、3か月以内に国に対して最終フォローアップを提出する作業の中では、かなりラップするだろう。中活のやってきた結論も、今我々が議論させていただいていることに繋がるのではないか。ここが我々としての反省点であることが、見えてきたところではある。

【委員長】

- ▼ここでの結論は別にそちらの方にもぶつけていただいて全然構わないと思う。考えている場所是一緒な訳だから、そういうふうにしていただいた方がいい。

【事務局】

▼事業の玉としては、それぞれ行政主体となってきた玉だけの議論だが、中活になれば民主導の部分もあるし、それぞれ各種団体がやられている部分もあるので、幅広くはなと思う。しかしながら、結果的に最後行き着くのはこの部分である。

▼最終フォローアップでは、中活協の最終意見もいただかないといけないところもあるし、そういう作業や市民感覚としてのアンケートをもう一回取るという作業も出てくる。その中でどんなものが出てくるかという部分は、結果的にここに行き着くと感じているところ。そのため、今回の議論部分を使わせていただかないと総括できないと踏んでいるところである。

【委員長】

▼それを使っていただいて構わないと思う。

▼今日出てきた意見を踏まえながら、最終的な取りまとめ作業をもう一回させていただくようなことかと。

【委員】

▼まちづくりセンターを整備して、通行量が増えて、人が増えたが、それをどううまく活用できるかという部分だと思う。もしかしたら、もう少し人が来なければ事業ができないのかもしれない。それが一歩前進して、人が集まり、商売になっていくようなものが出てくることが、きっと結論だと思う。場合によっては、もっと人が集まるような仕掛けをしなければ商売が生まれないのかもしれない。そうなれば、ベルロードにも店が張り付くことかもしれない。

【委員長】

▼だから、目標値が達成したので良かったとのレベルである一方、実体レベルとしては、あの数値はただの数値にしかすぎず、それを実体化するためのことを来年度きちんとやっていく必要があるだろう・・・というのが結論ではないか。それは以前事務局でつくった資料（意見交換に向けて）にはそういう気持ちで書かれた部分が相当ある訳である。そこだと思う。

【事務局】

▼事業の組立としては、商店主の最終的な生活を守るようなところまでは組み込めない。あくまで、街に人が通り、人が歩き、人が集まるという部分の事業に対して、行政が支援し、あとはそこを歩いていく人が増えたときに、商売としてそこに店しようが、お客さんを引き込もうが、それは商店主さんの腕次第というような感覚をやはり持った方がいいという部分は、今回の協議では少しさせていただいたところではある。そこをあまり表だって言うことはできないが。この都市再生整備計画でもいかに人を街なかに寄せていくかという中で事業の組み立てをしているし、市のスタンスもそのような形でやってきたことからいけば、一方で箱をつくり、人が通るようになり、見た目はキレイに収まったが、実体はどうかというところである。

【委員長】

▼今日申し上げたように、これから先にシナリオがいくつかあると思う。行政が大きくこういう方針でまちづくりを進めていこうと言い出すやり方もないわけではないし、いやいや、市民と協働しながら自主的な活動をつくりあげていこうよとつくりあげていくやり方もあるだろうし、その中間みたいなどっちもやるということもあるかもしれない。それをどんな玉でやるかというのもひょっとしたらあるかもしれない。そこで3・3を位置付けるということもひょっとしたらあるかもしれない。

【委員長】

▼そんなシナリオがいくつかあるが、なんでそんなシナリオがいくつかあるかといえば、根本は都市再生整備計画の評価指標が定量化されたものであり、目標達成されているけども、実体化が伴っていないというのが評価委員会としてまず一番最初の結論。その実体化をするために、いくつかのシナリオを今後やっていく必要がある。どれを選ぶかはここで決める訳にはいかない。ただどれも可能性があるにつけ、やはり共有化していくプロセスが絶対必要であり、ある一部の人たちの認識だけで物事を進めていくことは非常にまずい。今までもいろいろやってきたことを繰り返すだけの話になってしまう。そこはどのシナリオを取るにしても、共有化のプロセスというのをきちんと推進していくことが求められている。それを踏まえたものを具申として提出するということでよいか。

▼一応取りまとめの方針も皆様方と協議ができたということで、それに対して今後のスケジュールということになるが・・・。

【事務局】

▼もう一回取りまとめたものを皆さんに確認いただいて、最終的に時間が合えば市長に具申をするという形にできれば一番いいかと思うが、とりあえず、確認の会議後、事務局の勝手なことを言わせていただければ、小篠委員長に一任していただいて最終調整をした上で、委員長の方から市長と最終的に具申という形で時間をセットしたいと思っている。

会議資料

会議次第

資料 1 第 4 回滝川市都市再生整備計画事後評価会議の議事概要

資料 2 滝川市都市再生整備計画等に対する意見具申書（案）